Journal of Sociology & Social Work, 2022;No.1, p 37-51

資　　料

探求・理解プロジェクト「生命を考える」初年度成果報告
－運営方法及び成果と課題－

山川　　樹[※1]・釼明佳代子[※2]・鈴木　祐子[※3]・庄子　幸恵[※3]・矢萩　未来[※4]

要旨：本稿は2020年度に開講された全学共通教養科目群「探求・理解プロジェクト」の１つに位置づけられる「生命を考える」の実施報告書である。2020年度の「生命を考える」は医療福祉学部に所属する５名の教員がオムニバス形式で担当し，導入のための講義を2週行った後は４名の教員が３週ずつ，各自の定めたテーマについて講義を行った。また，2020年度は新型コロナウィルス感染症の影響で前期は完全遠隔授業，後期はグループワークを避けながらの対面授業であった。そこで，前年度から始まった開講のための準備から，各テーマの決め方，遠隔授業への切り替え等，「生命を考える」を運営する過程で得られた成果及び明らかになった課題について報告する。

キーワード：探求・理解プロジェクト，生命を考える，生命倫理，遠隔授業，感染対策

Ⅰ．はじめに

本稿は2020年度に開講された全学共通教養科目群「探求・理解プロジェクト」の１つに位置づけられる「生命を考える」の実施報告書である。開講初年度であるということに加え，前期は新型コロナウィルス感染症（以下，新型コロナとする）の影響で遠隔授業であったことを踏まえ，担当教員間でどのように打ち合わせを行い，実践し，成果が得られたか記録として残すことを目的とする。本稿では，まず科目の位置づけや目標について概説する。次いで，その実施に当たり担当者間でどのような準備を行ったかを報告する。第三に，「生命を考える」はオムニバス形式を採用したため，各担当者より担当回の具体的な運営方法について報告する。最後に１年間の実施を踏まえての成果及び今後の課題について述べる。

１．科目の概説

「探求・理解プロジェクト」とは，本学の全学共通教養科目群であり，原則として１年次生を対象とした学部横断型の科目群である。2020年度には「探求・理解プロジェクト」として「輝ける者」,「生命を考える」,「人間文化探求」,「生活の中の科学」,「地域活動･ボランティア」,「現代社会を視る」，そして「ボランティア探求」の７科目の開講が予定されていた。その中で「生命を考える」は，医療福祉学部に所属する教員を中心に構成されており，生命倫理について「健

※1　医療福祉学部保健福祉学科
※2　医療福祉学部リハビリテーション学科
※3　医療福祉学部看護学科
※4　医療福祉学部リハビリテーション学科

表 1. 2020 年度後期における生命を考えるの授業内容

講義テーマ	担当者（所属）	概要
ガイダンス・抑うつと自殺	山川樹（保福）	科目ガイダンス，レポートの書き方，幸福の定義など
死を考える―尊厳死と安楽死―	庄子幸恵（看護）	死の体験授業，尊厳死と安楽死等に関する講義
障害者の尊厳 ―身体的/精神的障害と共に生きるとは―	矢萩未来（作業）	障害者が差別された歴史，障害者の人権等に関する講義
生殖医療について―出生前診断―	鈴木祐子（看護）	出生前診断の概要，国ごとの施策の違い等に関する講義
死とは何か―生物学的死―	釼明佳代子（理学）	脳死や植物状態の違い，臓器移植の是非等に関する講義

康とは何か」,「死とは何か」を主たる科目テーマとしている。そして，健康とは何か,「生」そして「死」とは何かについて，他者の意見を踏まえながら自分なりの考えを述べられるようになることを目標としている[1)]。2020年度は医療福祉学部に所属する５名の教員が担当し，科目主担当教員が２週にわたり導入となる講義を行った後，残る４名の教員が３週ごとに個別のテーマを持ちまわるオムニバス形式を採用した（表１）。

２．運営の流れ

個々のテーマにおいてどのような内容を展開したかについては後述するとして，まずはテーマ決めや分担，講義開始までの準備内容，そして遠隔授業への対応ついて時系列に沿って説明する。

科目担当者に招集がかかったのは開講前年度（2019年）の10月上旬であった。この時点で概ね決定していたことは以下の３点である。すなわち①開講学期・開講時限，②対象及び履修定員，③１つのテーマにつき３週を割り当ててるという講義スケジュールの３点であった。反対に未定であった主な事柄は，①どんなテーマを取り上げるか（講義内容），②グループワークの進め方，③評価方法の３点であった。そこで以降は科目担当者で集まり，この未定事項３点についての協議を進めた。

科目担当者間の打ち合わせを2019年10月から2020年３月11日までの間に４回実施し，上記未定事項の検討を重ねた。まず検討したのは講義内容である。各テーマに関しては「生命を考える」という範疇で，各自がやりやすいテーマを考案して構わないということであった。しかし結果として，シラバス素案に挙げられていたテーマを分担可能ということで，新たに考案することはなかった。次に講義の進め方として講義とグループワークの時間配分や発表方法，討議テーマの設定，成績評価及び採点基準について順に検討を行った。なお，この後に述べるように結果として新型コロナの影響により当初予定していた様なグループワークやグループ発表を行うことはできなかったため，2020年度はグループに関する評価表を利用することはなかった。

ここまで４回の打ち合わせを経て開講の準備を整えてきたが，その後新型コロナの感染拡大を受け，感染予防の観点からグループワークを行わないという全学的な方針が打ち出された。そこで，３月31日に５回目の担当者会議が行われ，全体的に講義を中心としながら個人作業を行うという内容に変更を行った。その後さらに緊急事態宣言の発出に伴い，前期の遠隔授業が確定したため，５回目の会議で確定した内容をGoogle classroom を利用して遠隔で行うこことなった。また，探求・理解プロジェクトのうち合唱を中心とした「輝ける者」とフィールドワークを中心とした「地域活動・ボランティア」の２科目は実施困難との判断により閉講となった。これに伴い開講科目の定員が拡大され,「生

命を考える」では半期で最大90名の学生を受け入れることとなった。

最後に後期対面授業において「生命を考える」が講じた感染予防について報告する。「生命を考える」では約90名の履修者を16のグループに分け，グループごとに消毒用のアルコールが入ったスプレーボトルとペーパータオルをプラスチックケースに入れて配布した（図１）。そして，教室入り口での手指消毒及び教室内の換気に加え，講義終了後に各自が利用した物品を各自で消毒し返却させることとした。また，感染予防に配慮しながらの意見交換の方法として，全体を通じてホワイトボードペーパーとマジックペン，付箋を利用し筆談を行わせた（図２）。その他，教員ごとに工夫を凝らした意見提出方法を試行錯誤しているため，詳しくは次節を参照されたい。

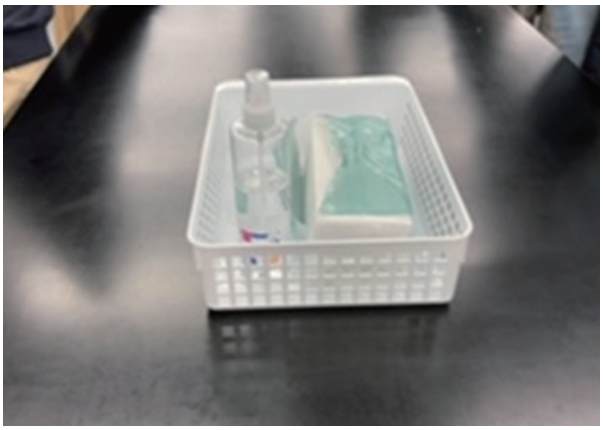

図１　グループごとに配布した消毒用具一式

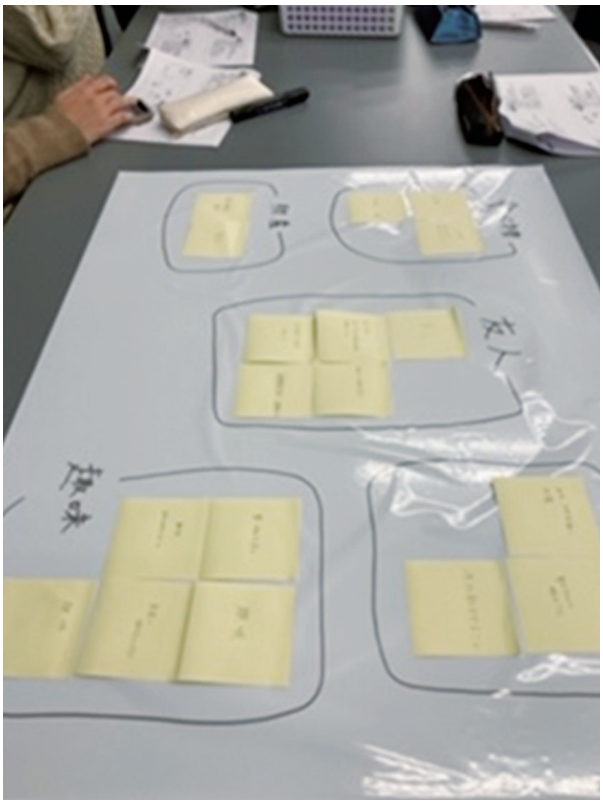

図２　付箋をとホワイトボードペーパーを利用した筆談中心のグループワークの様子

Ⅱ．各教員の講義運営

本節では講義テーマ（表１）ごとに，どのような狙いの元で講義を構成したか，あるいは個別に講じた感染対策と講義時間内ワークについて報告する。全体を通して共通することは，「生命を考える」は答えが明確でないことに対して，他者の考えに触れ視野を広げ，最終的には自分の考えを述べること目的としているため，他の履修者の意見や考えを知る機会を確保することに腐心したということである。そこで，遠隔か対面かに関わらず，テーマに関するアンケート結果やミニレポートの結果を Google classroom に提示したり資料として配布したりした。この他，担当教員ごとに工夫した点は以降の各節で適宜報告する。

１．第１，２週

まず，第１週と第２週はその後に控えたメインテーマの受講に先立つ準備時期として位置づけて講義を行った。特に第１回目では講義全般についてのガイダンスに加え，レポートの書き方指導に時間を割いた。著者自身の学生時代を振り返ると，大学生活では大量のレポート課題が課される反面，いわゆるテクニカルライティングのようなレポート執筆のノウハウを習うことはなかった。加えて，これまで著者が担当してきた２年次生以上を対象とした講義の中でレポートの書き方について説明すると「書き方がわからないまま課題をこなしていたので勉強になった」という感想が多く寄せられていた。これらの経験を踏まえ，１年次生が主な履修者である「生命を考える」では，今後の学生生活の中で課されるレポートに対処するための基礎的スキルの獲得を目指し，レポートの書き方を重視することとした。

レポートの書き方については，専ら加藤[2)]に基づき，６つのポイントを提示した。以下，各

ポイントについて概説する。第１ポイントは読み手のために書くということである。これはすなわち，書きたいことを書くのではなく，評価されることを念頭に読み手の負担を減らすことを意識して書くという，レポート執筆の基本姿勢のことである。そして第２から第５のポイントは読み手の負担を軽くするための具体的なテクニックの説明となる。第２に示したことは，最初に結論を述べるということである。第３のポイントは決して考えながら書かずに，段落単位でレポートを組み立て，一つの段落に一つの話題を述べるということである。これに関連して，一段落あたりの標準的な文字数を把握することにより，文字数制限のある課題では「何文字書く」から「何段落書く」という考え方をすることができることも説明した。段落数の目安をつけることで，そのレポート内で幾つの話題を展開すれば良いか考えれば済むようになるので，レポート課題に取り組む学生にしばしば見られる「後 x 文字書かなければいけないけれど，どうしようか」と文字数のかさ増しに悩むことは少なくなる。第４のポイントは１つの文で１つのことを述べるということである。換言すると，重文を避けてできるだけ単文の簡潔な文を多く書くことだと言える。そして，単文で文章を書くためには文と文の関係に適した接続詞を使用する必要があるので，接続詞の種類と機能を把握する必要があるという説明も行った。第５のポイントは正確に書くということであった。これは読み手によって解釈が異なりうる表現を避け，具体的に書いたり，程度の副詞を使わずに可能な限り具体的な数量を明示することである。そして第６のポイントとして，引用文献，参考文献を明示することの重要性を説明した。これはレポートの書き方のテクニックではない。学問に携わる者として他者の意見を自分のもののように記すこと（i.e., 盗用や剽窃）は，最も恥ずべき行為の一つであるため，引用を明記する必要があるのだと基本的なルールとして説明した。

第２週目は担当者の専門領域と照らし「抑うつと自殺」というテーマで講義を行った。発達心理学的に，現役大学生は自我同一性の形成が求められる発達段階にあり[3]，疾風怒濤と表現されるほど，メンタルヘルスが不安定になる時期である。また，本邦の統計資料によって，10代後半から20代前半は20代後半から60代後半よりも抑うつ傾向が強いだけでなく[4]，自殺者数の年代別推移に関して，20代から80代では過去10年間で自殺者数が減少傾向にあるのに対して，10代は増加傾向にあることが示されている[5]。講義ではこうした統計資料を示しながら，履修者たちが抑うつや自殺のリスクが高い状態にあることを説明し，日常的に自分自身のメンタルヘルスをマネジメントする重要性を説いた。

加えて，第２週ではグループワークの練習も行った。第１週目の最後に世界保健機構による健康の定義を示し，well-being とはどのような状態かを考えてくることを課題としていた。そこで，第２週ではこの課題で考えてきたことを踏まえ，まず，自分が身体的，精神的，社会的に健康であるために必要だと思うものを思いつく限り付箋に書き出させた。次いで，書き出したものをグループ内で共有し，KJ 法のようにカテゴリ化を行わせた。作業中は発言をせずにジェスチャーを中心にするよう指示することで飛沫の飛散を抑えることを目指した。最後に，グループで整理した付箋のまとまりの様子をスマートフォンで撮影した後に，教員にメール送信し，それをプロジェクターに投影することで，グループ全体の成果を共有した。この作業を通じて履修者は多くの人に共通して健康のために必要だと考えられるもの，そして自分独自に必要とするものの差異を知ることになったと考えられる。ただし，履修者の考案した必要な物の中には「住居」や「お金」のような必要最低限のものや抽象的なものも多く含まれていたため，健康とは単に生命が脅かされないという状態ではなく，身体的，精神的，社会的に充実して過ごせることであると，well-being の意味を振り返りながら補足を行った。

２．第３週から第５週（死を考える―尊厳死と安楽死―）

第３週から第５週は「死を考える」というテーマであった。ここでは主に２つのことを目的とした。１つ目は尊厳死，安楽死について考えることができること，そして2つ目は受講を通じ

て死について考え，自分の死生観を形成することができることであった。「死を考える」の3週に渡るスケジュールを表2に示す。

次に，各週の受講を通じた履修者の理解度について，毎回提出を求める感想及び最終回に提出を求めるレポートに基づき以下に示す。1回目では，「安楽死・尊厳死について学び国によ

表2.「死を考える」の講義スケジュール

回/期	前期（遠隔）	後期（対面）
1回	講義テーマ：尊厳死と安楽死 1. 尊厳死・安楽死とは 2. 延命治療の日本と欧米の違い 3. リビングウィルとは 4. 諸外国における安楽死のケース紹介 5. 死ぬ権利について 6. 死の体験授業 課題：死の体験授業を受けて別れの手紙を800字以内で書きなさい。	講義テーマ：前期と同様 1. 尊厳死・安楽死とは 2. 延命治療の日本と欧米の違い 3. リビングウィルとは 4. 諸外国における安楽死のケース紹介（事例と動画） 5. 死ぬ権利について 6. 死の体験授業 課題：死の体験授業を受けて別れの手紙を800字以内で書きなさい。
2回	講義テーマ：病院で死ぬということ 1. がん患者に対するインフォームド・コンセント 2. インフォームド・コンセントとは何か 3. インフォームド・コンセントの歴史 4. インフォームド・コンセントにおいて重要なこと 5. 病名を告知されない患者の苦しみ 6. 尊厳死の宣言書 7. 末期および進行期がん患者にインフォームド・コンセントが必要な理由 課題：日本人の 3 大死因は 1 位：がん、2位：心疾患、4位：脳卒中です。この中であなたが亡くなるとしたらどの病気で亡くなりたいか、また、その理由についても述べなさい。	講義テーマ：前期と同様 1. がん患者に対するインフォームド・コンセント 2. インフォームド・コンセントとは何か 3. インフォームド・コンセントの歴史 4. インフォームド・コンセントにおいて重要なこと 5. 病名を告知されない患者の苦しみ 6. 尊厳死の宣言書 7. 末期および進行期がん患者にインフォームド・コンセントが必要な理由 8. 実際の末期患者の事例紹介（動画） 9. 意見交換（パパパコメント） 課題：日本人の 3 大死因は 1 位：がん、2位：心疾患、4位：脳卒中です。この中であなたが亡くなるとしたらどの病気で亡くなりたいか、また、その理由についても述べなさい。
3回	講義テーマ：授業の振り返りとまとめ 1. 第2週目授業のふり返り 2. 授業のまとめ ・死の人称 ・自殺のサイン ・エリクソンのライフサイクル論 ・人間は死ぬまで発達成長する ⇒E・キューブラー・ロスの文献の紹介[6)] 最終レポート：この授業を受ける前と受けた後で、あなたの死生観がどのように変化したか1200～1500字以内で述べなさい。	講義テーマ：グリーフ・ケアについて 1. 第2週目授業のふり返り 2. グリーフ・ケアについて ・グリーフ・ケアとは ・グリーフの反応 ・グリーフのプロセス 3. 意見交換 4. 授業のまとめ 最終レポート：この授業を受ける前と受けた後で、あなたの死生観がどのように変化したか1200～1500字以内で述べなさい。

る違いがわかった」,「死の追体験をすることで死とは何かについて考えることができた。自分にとって何が一番大切なことかがわかった」等の感想が提出されていた。２回目では「病気になった時自分はどうしたいのかについて考えさせられた」,「インフォームド・コンセントについて患者に病名や症状を伝えるか伝えないかなど様々に考えることがあった」,「あらためて人には死ぬ権利があるのかを考えることができた」等の感想が提出されていた。また，死ぬ権利があるかないかについてアンケートを行った結果，84名中74名が「ある」６名が「どちらともいえない」４名が「わからない」１名が「ない」と回答した。第３回では「死について，深く考えることができた。死の重みについて考えさせられた」,「自殺のサインについて知ることができた」,「死を前向きにとらえることができた」,「家族の大切さがわかった」,「グリーフ・ケアについて学ぶことができた」等の感想が提出された。

最後に講義担当者が講義を行う上で意識したこと，講義を通じて考えたことを示す。担当者は看護師という医療職であり，今まで「がん看護」の臨床に８年間携わってきた中で多くの患者の看取りを行ってきた。この経験から今回の講義では「死」というものを履修者に考えてもらうにはどうしたらよいかという視点から構成を考えた。第１回ではこれから医療職に就く可能性もある履修者に尊厳死と安楽死の問題について事例を提示し，「死ぬ権利」について考えさせた。また「死の体験授業」[7] で「死ぬということはどのような事か」を考えさせた。第２回では「病院で死ぬということ」を通してがんの告知問題とインフォームド・コンセントについて考えさせた。第３回は前期と後期での講義の流れが変化した。後期の対面授業（第２回目）で「死ぬ権利」についての意見交換を行ったところ，９割の履修者が「死ぬ権利」は「ある」と意見し，かつ，中には「自分の生命なのだから自分で死を選んでよい」という意見があった。このことから，後期では第３回に「グリーフ・ケア」について追加した。なぜなら自分の死を家族や身近な人はどのように感じるのかについても客観的に考えてもらいたかったからである。３回の講義を通して最終レポートテーマを「受講前後の自分の死生観の変化」をテーマとした。その中で多くの履修者が「死の体験授業」を受け，自分の死の捉え方に変化があったと書いていた。また，グリーフ・ケアの講義を通して自分の死だけではなく家族や身近な人への死についても考えることができたということを挙げていた。さらに，講義のまとめの中で自殺（自死）のサインについても説明したが，そのことについても自殺のサインがわかった，自分は自殺を選ばないようにしたいなどの意見が多くみられた。今後の課題としては，遠隔授業の中でも意見交換ができるような工夫が必要だと考えた。

３．第６週から第８週（障害者の尊厳―身体的／精神的障害と共に生きるとは―）

第６週から第８週は「障害者の尊厳」というテーマであった。このテーマの目的は，障害の概念や法制度，障害者を取り巻く社会的な実情について学習し，障害者の権利や人間の尊厳，生きることについて考えを深め，自分の意見を述べることであった。「障害者の尊厳」の３週に渡るスケジュールを表３に示す。

次に，各週の受講を通じた履修者の理解度について，毎回提出を求める感想及び最終回に提出を求めるレポートに基づき以下に示す。第１回では学生が抱いていた障害・障害者に対するイメージはネガティブなものが多かった。一方で，講義内容や他の履修者の意見を知ることで，自分の障害の捉え方について改めて気づいたり考えたりする機会が提供できたと考える。第２回では，精神障害者が自身の言葉で差別や偏見に関して述べる動画[10] に対して「統合失調症などの精神疾患を持っている方に対して恐怖感があったが今日のインタビュー動画を見て，障害者を一括りにして怖いと思うことは失礼だと考えた」,「精神疾患の方の話を動画とはいえ自分では今まで聞こうとしなかったので聞けて良かった」といった感想が聞かれた。後期は私宅監置を題材として追加し，画像資料を提示しながら差別や偏見，生きる権利について考えてもらった。履修者のほとんどが精神障害者の歴史的背景について知らず，日本でも精神障

表 3.「障害者の尊厳」の講義スケジュール

回/期	前期（遠隔）	後期（対面）
1 回	講義テーマ：障害とはについて 1.　障害の捉え方　・ICIDH と ICF 2.　医学－生活－社会モデル 3.　ALS の方と出会った東大生の感想 [8] 課題：「障害とは？」について考えを述べる	講義テーマ：前期と同様 1.　障害の捉え方　・ICIDH と ICF 2.　医学－生活－社会モデル 3.　バリアフルレストランの紹介 [9] ワーク：障害・障害者へのイメージ→分類 課題：「障害とは？」について考えを述べる
2 回	講義テーマ：障害者の権利と差別について 1.　ミニレポートの共有 2.　権利条約、差別解消法、合理的配慮 3.　差別・偏見への事前調査結果共有 4.　当事者・家族の声（資料・動画）[10] 5.　津久井やまゆり園の事件 課題：①障害者の権利②差別や偏見をなくすためにはについて考えを述べる	講義テーマ：前期と同様 1.　ミニレポートの共有 2.　権利条約、差別解消法、合理的配慮 3.　差別・偏見への事前調査結果共有 4.　当事者・家族の声（資料・動画） 5.　精神障害者の制度、歴史的背景 [11] 6.　ワーク：差別、偏見の改善案を模索 課題：①障害者の権利について考えを述べる
3 回	講義テーマ：障害と共にその人らしく生きることについて 1.　ミニレポート、アンケートの共有 2.　バリアフルレストランの紹介 3.　自立生活運動、自立の概念 4.　自立生活を送っている事例紹介 ①頸髄損傷②重度自閉症（動画）[12] ③統合失調症（動画） 最終レポート：障害と共にその人らしく生きることについて考えを述べる（1500～1600 字）	講義テーマ：前期と同様 1.　ミニレポート、アンケートの共有 2.　自立生活運動、自立の概念 3.　自立生活を送っている事例紹介 ①重度自閉症（動画）②統合失調症（動画）[13] ③ALS の方と出会った東大生の感想 4.　ワーク：あなたが考える自立とは？ 最終レポート：障害と共にその人らしく生きることについて考えを述べる（1500～1600 字）

害者に対し非人道的な扱いをしていたことに対する驚きや衝撃的な思いを綴る者が多かった。また，障害者の権利に関して様々な考えが述べられていた（表 4）。以上のことから障害者の権利を綺麗ごととして捉えるのではなく，より身近に重みを持って考える機会が提供できたと考える。第 3 回は講義の前半にワークを導入し，履修者が抱いている「自立」のイメージの確認と共有化を図った。その結果，履修者は「自立」に対して「人に頼らず自分で生活する」「自分のことが自分でできる」「自分で生計が立てられる」というイメージを抱いていることが分かった。しかしその後の講義で，自立生活運動（IL 運動）と自立の概念「ADL（Activities of Daily Living= 日常生活活動）を誰かに依存しながらでも，自分の判断と意思による自己決定が尊重され，行使できることが障害者の自立である」を紹介したことに加え，精神障害者や重度自閉症者が誰かと寄り添いサポートを受けながら社会生活を営んでいる動画[12,13] を提示したことで，多くの履修者は自立に関する考え方が変わったと述べていた。

最後に講義担当者が講義を行う上で意識したこと，講義を通じて考えたことを示す。履修者からは「他の人の意見を聞いてポジティブな面に気付くことができた」「自分が思っている以上に，障がい者にネガティブなイメージを持っていることに気づいた」「今回の授業は様々な意見を聞くことができた」といった感想が聞かれた。最終的に履修者は一連の講義内容を踏ま

表 4.「障害者の尊厳」で提出された感想の抜粋

1 回目	• 障害とはその人自身の機能や能力に障害があることではなく、その人の生活のしづらさであり、誰にでもそのような状況に置かれうる存在という考え方が大切 • 障害とは何かに対して何らかの不利があるわけでなく、新たな生き方の 1 つに過ぎないのではないか • 障害とは、その人の生活につきまとい、どう生きるかを考えさせるもの • 障がいとは、その人の持つ特徴や個性の一つであると考える。壁を乗り越えるために身に付けた技術は、その人の得意なことでもあり力である • 障害とは生きづらさ、生活の中での不自由だと思います。障害が有るか無いかは他人や社会が決める事ではなく本人が決める事だと思います • 私は障害とは何も病気や不自由な点を持っていない人が生活に不自由にしていると見える人の主観的に見て作られた偏見だと考えました
2 回目	• 生きる権利は誰もが持っているものであり、障害を持っている人、持っていない人で変わらない。 • 私は障害者の方の権利として、自由に生きる権利が足りていないと思います。 • 障害者の権利についての有無は関係ないと思いました。その権利の有無について話す事自体が私は、差別なのでは無いのかなと考えました。 • 先天性な身体障害を持つにしろ後天的な身体障害や精神障害を持つにしろ 1 人の人間である。ただ 1 人でできないことが普通の人よりもあるだけだ。1 人でやれないのであれば、周りが一緒になってやってあげればいいし、そこにはもう「権利」の違いはないと考える。

え「障害と共にその人らしく生きること」について，思い思いの考えを自由に述べていた。今回の題材を通して，改めて生きることとその人にとっての価値や意味，生命の尊さについて，少しでも考える機会が提供できたのではないかと考える。今後の課題として，個人の考えがどのように変化していったかについては明らかではないことが挙げられる。講義の目的・目標が達成できているかを明確にするためには履修者の考えとその経時的変化が分かるような講義内容及び課題提示について模索する必要性を感じている。

4．第 9 週から第11週（生殖医療について―出生前診断―）

第 9 週から第11週は「生殖医療について」というテーマであった。このテーマの目的は，出生前診断について学習し，出生前診断に関する自己の考えを確認するとともに，生命とは，死とはについて考える一材料とすること，そして出生前診断について，他者の意見を踏まえながら自分の考えを述べることができることであった。「生殖医療について」の 3 週に渡るスケジュールを表 5 に示す。

次に，各週の受講を通じた履修者の理解度について，毎回提出を求める感想及び最終回に提出を求めるレポートに基づき以下に示す。履修者への事前アンケート（前期実施 n=94）では出生前診断について「おおよそ知っている」6.4%，「なんとなく知っている」43.8%，「ほどんど知らない」30.9%，「全く知らない」19.1%という結果であり，出生前診断についての予備知識がない学生が半数を占めていた。この他の履修者の感想を表 6 に示す。

最後に講義担当者が講義を行う上で意識したこと，講義を通じて考えたことを示す。講義内容を考えるにあたり，現時点で出生前診断のトピックとなっている内容を含めることを軸とし，医学用語についてもできるだけ表現を工夫し説明した。さらに講義後の感想，質問をふまえ補足説明を行った。他者の意見を知るということに関して，完全遠隔授業であった前期は

表 5.「生殖医療について」の講義スケジュール

回/期	前期（遠隔）	後期（対面）
1 回	講義テーマ：出生前診断とは，基本事項 1.　出生前診断とは 2.　出生前診断の種類 3.　出生前診断の是非 4.　出生前診断と人工中絶 課題：講義内容をきいた時点での出生前診断に対する自身の考えを自由に述べる。（200 字）	講義テーマ：前期と同様 1．出生前診断とは 2．出生前診断の種類 3．出生前診断の現状 4．診断のメリット・デメリット 文書資料 [14] 個人ワーク①：出生前診断に関連した妊婦の気持ちを考える 課題：出生前診断のメリットとデメリットについて考えを述べる。（200～400 字）
2 回	講義テーマ：出生前診断をとりまくもの 1.　ミニレポート内容共有 2.　歴史的背景 3.　関連する法律 4.　諸外国の状況 5.　診断のメリット・デメリット 課題：講義内容をきいた時点での出生前診断に対する自身の考えを自由に述べる。(200 字)	講義テーマ：前期と同様 1.　ミニレポート内容共有 2.　歴史的背景 3.　関連する法律 4.　諸外国の状況 5.　選択的妊娠中絶 6.　親の権利・子どもの権利 個人ワーク②：子どもの立場で考える グループワーク：妊娠継続の判断に影響する要因を考える。 課題：妊娠継続の判断に影響する要因に関し、親が最善の選択をするには何が必要か考えを述べる。（200～400 字）
3 回	講義テーマ：出生前診断を受けた当事者の思い 1.　ミニレポート内容共有 2.　親の権利・子どもの権利 3.　選択的妊娠中絶 音声、文書資料 [15,16] 課題：出生前診断について考えを述べる。（1800 字）	講義テーマ：前期と同様 1.　グループワーク内容、ミニレポート内容共有 動画 [17]、文書資料 [15),16),18] 最終レポート：出生前診断について考えを述べる。（1600～1800 字）

ミニレポートの回答内容を一覧にして Google classroom で共有し，対面授業となった後期は，サイレントでのグループワークを実施した（図２）。結果として，「他の人の考えを知ることができた」「自分は考えなかった意見を知ることができた」という感想がきかれ前期後期ともに限られた中でも考えを共有することができていたと考える。次に，前期の反省をふまえ後期へ向けて変更した点について述べる。前期の最終レポートで履修者が記載した内容をみると，人工妊娠中絶に着目した学生が多く見受けられた。出生前診断の結果を受け，結果として人工妊娠中絶を選択することの是非については，出生前診断について考えるときに必然的に付随す

表 6.「生殖医療について」で提出された感想の抜粋

- 出生前診断の辛さ、妊娠することは嬉しいことなのにこんなに考えなきゃいけないということがわかった。
- 出生前診断などについて少しの理解しかなかったが、他者の考えやデメリットも考えたので、より深く考えることができた。
- 出生前診断については、自分にも大きく関わってくることで、障害を持っているからと言って産まれる前の命の選別をしてもいいのか考えさせられた。
- 自分の命や家族の命について考えたことはあったが、赤ちゃんの小さな命について考えたことがなかったのでとてもいい機会になった。中絶することなく私を産んでくれた親に感謝したい。
- 出生前診断について学んで、あまりいいイメージを始めは持てなかったが、3 回の講義を受けていくうちに様々な視点で考えることができ簡単に賛成や反対を出せる問題ではないなと感じた。
- 出生前診断をすることによって知れて良かった、知らなかった方が良いという、人それぞれの考え方があるように、障害を持っていても持っていなくても、自分たちの答えを精一杯探すことが一番の正解なのだと考えた。
- 出生前診断で胎児に障害があると診断された妊婦さんへのサポートと理解が、今の日本にはまだまだ足りないのではと感じた。これからもっと医療が進んでいくにあたって生殖医療や倫理的なことの知識を当たり前に持ち、理解ができる世の中になってほしいと強く思う。

る内容であるため後期の講義に導入した。また，人工妊娠中絶を最終レポートのテーマとすることは「生命を考える」という本科目の主旨には反していない。しかし，できるだけ出生前診断を受ける「当事者の視点」から倫理的課題について理解し，最終的な考えを述べられることを意図したいと考え，後期の講義では個人ワークやグループワークの内容を設定した。その結果，当事者へのサポートの必要性や現時点での課題について，より当事者目線で，より俯瞰した視点で考えることができていたと考える。

出生前診断は，「妊娠」という履修者が未経験のことを理解する必要があったが，基本となる知識をふまえ，出生前診断を受けた当事者の思いを理解する記事，書籍，動画などを活用し，机上の知識からの考えにとどまらず，多様な考えがあること，正解はひとつではないことなどなど含め，最終的に自分なりの考えをもつことができていたと考える。

5．第12週から第14週（死とは何かー生物学的死ー）

第12週から第14週は「死とは何か」というテーマであった。このテーマの目的は，脳死と臓器移植に関して学習し，生物学的死について考え，脳死は人の死なのか自己の意見を述べることができることであった。他者の意見を聞き，様々な考え方に触れながら臓器移植に対して自己の意思を示すことができることであった。「死とは何か」の 3 週に渡るスケジュールを表 7 に示す。

次に，各週の受講を通じた履修者の理解度について，毎回提出を求める感想及び最終回に提出を求めるレポートに基づき以下に示す。まずは問題提起として「脳死を人の死だと思うか」について講義の終了時に Google form を用い意見を聴取した。また前期は毎講義後に同様の質問をしていた。集計した結果を表 8 に示す。表 8 より，最初は半数近い履修者が脳死は人の死だと思うと回答していたが，講義を重ねることでその割合は減少し，反対に「脳死は人の死だ

表 7. 「死とは何か」の講義スケジュール

回/期	前期（遠隔）	後期（対面）
1 回	講義テーマ：脳死の定義と臓器移植法・日本の臓器移植の現状 1.　脳死と植物状態の違いについて 2.　脳死の判定基準とは 3.　脳死と臓器移植の歴史 4.　日本と海外における臓器移植の現状 5.　移植体験者の声 [19] 課題：あなたは脳死を人の死だと考えますか？臓器移植に対する意思表示（臓器提供意思表示カード）記載	講義テーマ：前期と同様 日本の移植事情 [19] 個人ワーク①：Googleform を使用 あなたは脳死を人の死だと考えますか？（理由を含めて）脳死と臓器移植について家族や友人と話し合ったことがありますか？について回答を得て共有 課題：臓器移植に対する意思表示（臓器提供意思表示カード）記載
2 回	講義テーマ：脳死は人の死なのか。家族が脳死と診断された視点から臓器移植を考える 1.　ミニレポート内容共有 2.　脳死から心停止までの時間 3.　脳死者は動く―ラザロ徴候―[20] 課題：脳死と判定された家族の手記 [21] を読み、臓器移植についての考えを記載	講義テーマ：前期と同様 1.　ミニレポート内容共有 2.　脳死から心停止までの時間 3.　脳死と判定された家族の動画 [19,22] 4.　グループワーク（臓器移植を認めると認めない場合の良い点と良くない点） 課題：脳死と判定された家族の手記を読み、臓器移植についての考えを記載
3 回	講義テーマ：脳死は人の死なのか。自分が脳死となった視点から臓器移植について考える 1.　ミニレポート内容共有 2.　脳死患者が痛みを感じている可能性 課題：脳死を人の死だと思うか。臓器提供についての意思表示の最終提示。脳死と臓器移植についてどのように考え、変化したのかについて 1500~1600 字	講義テーマ：前期と同様 1.　グループワーク、ミニレポート内容共有 2.　脳死者は動く―ラザロ徴候―[20] 3.　脳死患者が痛みを感じている可能性 課題：脳死を人の死だと思うか。臓器提供についての意思表示の最終提示。脳死と臓器移植についてどのように考え、変化したのかについて 1500~1600 字

表 8. 「脳死は人の死だと思うか」という問いに対する履修者の回答割合(%)

	1 回目(n=90)	2 回目(n=91)	3 回目(n=91)
死だと思う	44.4 (68.0)	26.4	27.5
死だと思わない	33.3 (16.0)	44.0	57.1
わからない	22.2 (16.0)	29.7	15.4

※1 回目丸括弧内は後期の回答割合

と思わない」と回答する割合が増加していた。この変化は，３回の講義の中で，人工呼吸器を外した後も１年以上心臓が動き続けた事例があることや，脳死状態の妊婦が出産した事例，ラザロ兆候などを紹介し，脳死者が意識も感覚もなく遠からず死ぬかどうか現代の医学では断定できないことを示した結果だと考えられる。また，初回は分からないと回答していた割合が，

最終回までに減少したことに関しては，暫定的なものかも知れないが，自分の意見を示せるようになった履修者が増えたことを示唆している。

最後に講義担当者が講義を行う上で意識したこと，講義を通じて考えたことを示す。脳死と臓器移植については，小中高で学習した経験がある，自分なりに学習した，脳死という言葉は知っているものの初めて概念に触れるなど様々であった。しかし講義を通じてそれぞれの意見を共有し，最終的に自分なりの結論をレポートに記載することができたと考える。実際，最終レポートでは講義を通した考えの変化が記載され，自己と異なる意見に触れた感想が多く寄せられた。また，講義を機会に家族や友人と臓器移植について話をすることができたという意見もあり，講義目標に近づいたのではないかと考えられる。前期から後期への改善点として，脳死と診断された家族インタビューなど動画の量を増やし，立場の違いから多様な考え方に触れるよう工夫した。

Ⅲ．まとめ

最後に，以上を踏まえて2020年度の「生命を考える」の評価，反省を行うと共に，今後の担当者に向けた提案を行う。2020年度の「生命を考える」では，総じて講義目標である「健康とは何か，「生」そして「死」とは何かについて，他者の意見を踏まえながら自分なりの考えを述べられるようになること」を達成できたと考える。新型コロナの影響で遠隔授業を余儀なくされただけでなく，当初予定していたようなグループワークやグループ発表を行うことはできなかった。しかし，Google classroom や各教員が創意工夫を凝らした講義や講義時間内ワークを通じ，履修者は生命倫理に関する様々な基礎的知識を得た。さらに，自分とは異なる他者の意見に触れながら，意見の多様性，「生命」に関して考え続けることの重要性，これから解決していく必要のある問題点を知る機会になったと考えられる。毎講義及び科目全体に対する感想でも，「今まで考えたこともないトピックについて調べ，考える機会になった」や「この授業をきっかけに家族と生命について話す機会を得た」など，好意的な意見が大多数を占めていた。

また，講義中心に方針を変更した結果，気づいたこともあった。当初の予定では講義を１週行い，グループでの調べ学習を１週，発表に１週使う計画であった。しかし，３週間講義を行ってみると，履修者全体に説明すべき各テーマに関する基本的知識が思いのほか多いことが判明した。今後新型コロナが終息し，十全にグループワークを行えるようになったとして，履修者の基礎的知識水準を揃えることと，履修者の自主的な調べ学習や交流，発表の機会とのバランスをどのように取るかは課題になると考えられる。

この他，コロナ禍特有のものとはなるが反省点もあった。対面授業であった後期には筆談を中心としたワークを実施したが，やはり発話をゼロにすることは出来なかった。手指の消毒や換気，座席位置の把握を毎回行っていたとは言え，一定の感染リスクを孕んでいたことは反省すべき点であったと考える。この点について，本稿執筆時点（2021年３月末日）では，まだ2021年度の講義方針が確定していないものの，対面授業を行うことが決定した場合には，ワーク時にフェイスガードの着用を義務付けることを検討している。具体的にはクリアファイルを利用することで安価に用意できるフェイスガードを履修者に配布することを計画している。また2020年度は急遽閉講になった科目があったために定員が60名から90名に増加し，教室が「密」な状況であった。この定員増加の問題は2021年度には解消される見込みであるため，履修者間の距離も十分に確保することができ，より理想的な感染対策を講じられると考えられる。

最後に，手探りで運営した初年度の経験を踏まえ，今後「生命を考える」を担当される教員に向けて３点提案を行う。１点目は講義テーマについてである。2020年度は既にシラバス素案があり，指名された担当教員でそれを分担することが可能であったために，表１のようなテーマで講義を行った。しかし，これらテーマを踏襲し続ける必要は全くなく，各担当者の専門領

域に合わせて積極的に変更して欲しいと考える。生命倫理に関するトピックとしては，今回「生命を考える」で取り上げたもの以外にも例えば人工授精や代理出産及びその親子関係，再生医療におけるヒト胚の破壊の是非を巡る問題，老いて介護されることに対する自己決定権など[23]，多種多様なテーマが考えられる。前例に縛られることなく，その年の担当者の得意とする領域で講義を展開して欲しい。

２点目は履修生に生じる受講前後の変化，換言すれば講義目標の達成度をどのように測定し評価するかということである。これまでは，最終週に講義全体の振り返りを行うと共に，履修した感想の提出を求めていた。しかしこの方法では履修前の状態が不明である。想起バイアスの影響を受ける可能性も考えると，より客観的に測定し，評価する方法が望ましいだろう。一方で「他者の意見を踏まえながら自分なりの考えを述べられるようになること」という目標を心理尺度などで量的に測定することは難しいと考えられる。そこで１つの提案として，例えば「あなたは生きるとはどのようなことだと思いますか」，「あなたは人の死についてどのように考えますか」のような講義の内容に関する抽象的な質問を第１週と最終週に行い，記述内容の変化（量や具体性）を質的に比較してはどうかと考える。

３点目は，先に述べた通り講義とグループワークのバランスに関することである。これは提案事項と言うよりも，要検討事項の引継ぎに近いものである。2020年度はこれまで述べた通り，新型コロナの影響により講義中心にせざるを得ない状況であった。しかし，いつかはこの事態も終息しコロナ禍以前のように気兼ねなくグループワークを行える日が来ることであろう。そのような日が来た暁には，講義とワークのバランスを見直して欲しいと考える。また，知識の獲得を重視するのか学部の垣根を超えた履修者間の交流を重視するのかは，探求・理解プロジェクト全体の方針に関わることであろう。このバランス次第では，発表やレポートの内容のみを評価対象とするのか，一定の知識が獲得されたことをペーパーテストなどの実施により評価するかなど評価方法の検討にも影響すると考えられる。著者らが１年間科目を担当した所感としては，講義のパートを１週のみで終わらせることは難しく，少なくとも1.5週から２週程度は講義を要するのではないかと考えられた。残りの時間を履修者間のどのような作業に充てるのか，継続して検討して欲しい。

Ⅳ．引用文献

1）東北文化学園大学教務課 . TBGU シラバス医療福祉学部2020;2.

2）加藤司 .『パーソナリティ研究』に採択される方法――投稿論文の問題点とその対応策 . パーソナリティ研究 , 2016;25(1): 1-9.

3）Erikson E. H. Identity and the life cycle. International Universities Press, 1959.（エリクソン , E. H. 西平直，中島由恵（訳）. アイデンティティとライフサイクル , 東京 : 誠信書房 , 2011.

4）厚生労働省大臣官房統計情報部 . 平成12年保健福祉動向調査（心身の健康），厚生統計協会 , 2002.

5）厚生労働省自殺対策推進室 . 警察庁の自殺統計に基づく自殺者数の推移等 , 2020.

6）E・キューブラー・ロス .「死，それは成長の最終段階」続・死ぬ瞬間， 東京 : 中央公論新社 , 2001.

7）山崎章郎 . 死の体験授業 , 東京 : サンマーク出版 , 2015.

8）「障害者のリアルに迫る」東大ゼミ著 , 野澤和弘編著：障害者のリアル×東大生のリアル . ぶどう社 ,2016.

9）バリアフルレストラン：日テレ NEWS24. https://www.news24.jp/articles/2020/02/18/07596852.html（参照：2020-10-28）.

10）首相官邸 : 心のバリアフリーについて . 障害当事者の「困りごと」についての動画ロングバージョン .https://www.youtube.com/embed/m6jXc2sKH9o（参照2020-11-07）.

11）原義和・高橋年男 : 消された精神障害者 . 高文研 ,2019.

12) 株式会社ドコモ・プラスハーティ：重度障がいのある我が子の自立した生活（独立生活）/ ミライのトビラ．https://www.youtube.com/watch?v=B-5u6RdK70Y（参照：2020-11-14）.
13) 厚生労働省動画チャンネル（YouTube）：地域生活をおくる精神障害者を知ろう（4）.https://www.youtube.com/watch?v=CLhhMUfC7Ss（参照：2020-11-14）.
14) 古川雅子 : 新型出生前診断の増加は障害児排除につながらないのか . AERA2016年10月31日号 . https://dot.asahi.com/aera/2016102400154.html?page=1~4（2020.11.30 閲覧）
15) 河合 蘭 . 2 度のダウン症妊娠「産む」「産まない」両方の決断をした夫婦の思い , 出生前診断と母たち15 様々な決断 , 現代ビジネス , 講談社 .https://gendai.ismedia.jp/articles/-/73672（2020. 7 . 6 閲覧）
16) 野村優夫（NHK スペシャル取材班）: エピローグ . 出生前診断，受けますか？納得のいく「決断」のためにできること . 講談社 . 東京 .2017
17) NHK スペシャル「出生前診断 その時夫婦は」抜粋（2012年 9 月16日放送）
18) クリフム夫律子マタニティクリニック監修 : 出生前診断のこころえ それは真剣に赤ちゃんを想う夫婦の証 https://www.prenataltest-knowledge.com/couple/abortion.html（2020.11.30 閲覧）
19) 移植体験者の声・日本の移植事情・提供した家族の声：日本臓器移植ネットワーク https://www.jotnw.or.jp/learn/library/gallery/（2020.10.30閲覧）
20) Allan Ropper：Unusual spontaneous movements in brain-dead patients. Neurology. 34(8):1089–1092, AUGUST 1984
21) 藤村志保：脳死をこえて．読売新聞社
22) 家族が最後を決めるとき～脳死移植命めぐる日々～ NHK スペシャル https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/blog/bl/pneAjJR3gn/bp/ppVdAGAd8Y/（2020.11.01閲覧）
23) 玉井真理・大谷いづみ［編］. はじめて出会う生命倫理 , 東京 : 有斐閣 , 2011

Exploration/Understanding Project "Thinking about Life" First Year Results Report: Management Method, Results and Issues

Itsuki YAMAKAWA, Kayoko KENMYO, Yuko SUZUKI,
Yukie SHOJI, Miku YAHAGI

Abstract

This paper is the implementation report of "Thinking about Life", one of the " Exploration/Understanding Project ", a group of general education courses offered in the 2020. After two weeks of introductory lectures, four faculty members gave lectures on their own themes for three weeks each. In addition, due to the effects of COVID-19 infection, the first semester of the 2020 academic year was completely taught remotely, and the second semester was taught face-to-face while avoiding group work. In this paper, I will report on the results obtained and issues clarified in the process of managing "Thinking about Life," including preparations for the start of the course that began in the previous year, how each theme was decided, and the switch to remote classes.

Key word : Exploration / Understanding Project, thinking about life, bioethics, on-line education, infection control